

近況と雑感

飯山敏道（千葉大学理学部）

10年余りの年月を慌しくも、快適に過ぎて頂いた東大理学部とお別れしてから9ヶ月が流れた。

ふりかえてみると、私は理学部の教官、事務官、職員、学生の皆さんの御好意を享受して暮すことができた果報者であったことに気付く。教授会、委員会、その場、その場で思った事を述べさせて頂く私に、好意の眼差しで肯いて下さった先生方の顔が目に浮ぶ。理学部事務局は、私が当面する問題を常に、私の立場に立って考え、解決策を出して下さる世にも稀な所であった。職員、技官各位は、他教室の私であるにも拘らず、技術的な問題で伺いに行くと、持っておられる know how のすべてを教えて下さった。学生諸君は、私のつたない、恐らく穴だらけであったかも知れない講義を聞きに来て下さり、試験やレポートでおたずねした、私の話の内容に対する感想の中で、非常に興味ある反応を示して下さい、楽しい思いをすることができた。こゝに改めて厚く御礼申し上げる次第である。

赴任した当時、あれも実現しよう、これも始めようと思ひやりかけたことがかなりある。しかし、やたらと会議、委員会の多いことは、東大も、日本の一般と変わらず、これにふり廻されて、何一つとことんまで成しとげられなかった。まことにお恥しい次第である。これは、私の時間と能率に対する感覚のズレのせいで、自業自得である。もっとも、私と一緒に手を汚し、油まみれになって仕事をして下さった院生、学部学生の方々が、今は一人前の研究者や技師となって、地道であるが非常に興味深い成果をあげ始めておられるのを見ると、“私は私のやり方でよかったのだ”と思うこの頃である。きれいごとを並べさせ、多くの文献の集大成をさせることを佳とせず、小さくても、納得の行く結論を要求したことを悔いる気は毛頭

ない。十指に余る、これらの方の研究成果を伺う度に、嬉しく感謝の気持ちで頭が下る思いがする。

扨て、今居る千葉大学の様子をお知らせしよう。

御承知のように、こゝは新制地方大学の一つである。首都圏にあるが、キャンパスにまだ余裕があり、広々とした感じを与える。校舎は戦後の規格型校舎が殆んどで、趣きがない。中にはすでに傷みがひどく、改築が行われているものもあり、少しアクセントがついて来ている。駒場キャンパスより少し広く、本郷よりはるかに小さい敷地に、法経、教養、教育、工、文、理、薬の7学部が存在している。松戸にある農学部の前身が高等園芸学校であるせいか、学内の造園と保守には多大な努力が払われている。植込みの木々の剪定、落葉の清掃等に働く人々の姿をいつも見かける。

理学部は、数、物、化、生物、地学（含地物）の5教室からなり、各教室は夫々4講座（数学は5講座）。一講座は教授、助教授、助手各一名、従って、理学部の世帯は小さい。学生は、今年から各学科40名/学年となった。この点はかなり不利で、学生ひとりひとりに十分な面倒をみてあげられないくらいが少くない。大学院は、各学科に修士課程があり、更に数物系は工学部の一部と共に物質系の博士コースを形成して今年から発足した。生物、地学は、農学部と共に、環境系として明春（昭和63年）から発足する。

学生達はその知的活動の potentiality と言う面では、東大の学生諸君と同じ位のように思う。修論、卒論、大学院入試でこのことを感ずる。惜しむらくは、入試（学部の）は縦割りの各学科別であるにも拘らず、1～2学年の教養学部の教育と学部のそれとの間のつながりが全くなく、学部でもう一度初歩的な基本を駆け足で説明しなければならぬことである。語学力の不足が目立ち、

文献の解説の指導にかなりの時間を割かねばならない。教養学部のカリキュラムに私達学部の人間が口をはさむことができないことに起因するようである。駒場と本郷の間でも同様な問題があった。こゝでの問題はそれ以上である。

千葉大学における縦割り制度の利点は、むしろ、学生の colleagues 意識の形成が早くから生まれることかも知れない。専門外のことに興味をもたなくなり易い弊もあるが、互助の気持ちが強い。自分の卒論の時間を割いて、級友の実験の手伝いをしたり、3年生が4年生の仕事の一部を分担していることも少なくない。又学生のひとりが病気になるったり、少々落ちこんでしまったりすると、先輩格の数人が、種々面倒をみている。又教官と学生の仲間意識も容易に成立ち、うっかりすると、時間のたつのを忘れた討論、おしゃべりのため、終電ギリギリに駅に駆けこむ破目におちいる。彼等の心の底にある向上心、自分達の教室と言う意識は見逃せない。

これ程愛すべき若人達なのに、世の中は何で東大生と彼等をこうも差別するのだろうか。就職シーズンの間、私はその実態を見せつけられ不愉快でならなかった。“うちは千葉大卒業生を採用しない”と言われて、すすぐ帰って来る学生に、どうして“何故千葉大からは採らないのですか”と聞きなおらなかったのかと何度言ったことだろう。ひどい時には、応募書類の提出を拒否する所すらあった。この屈辱感に身も心も疲れてしまう彼等を元気づけるのに苦労した。

そのような事情も手伝って、教官達の間、沢山の事を教えようと言う気持ちがかかなり強いのを感ずる。4講座の教室に割り当てられている非常勤講師の定員が20名なのに私はびっくりしてしまった。授業、授業で学生達に耳学問を強いてよいのだろうか。学生時代に、本当に身につけることが出来たものが、たとえ一つだけであっても、その方が百の知識よりも貴重だと思うのは私だけなのだろうか。今私が持っている know how は、卒業後に独学で、同じ所を何度もよみ返し理解し

たもの、実際に手を汚して得たものであることを思うと、この傾向の効果を疑ってしまう。

研究設備や研究費の状況を少し見よう。校費のうち講座に来るものは、一講座170万円であるから、これは東大と大差ない。しかし科研費として理学部教官が運よく得ることができたものの総計が3千万円前後であるには少々おどろいてしまった。教官数が少いとは言え、貧弱すぎる。会計はすぐ“こゝは東大のように行きません”と言う。教官の一部にも半ばあきらめに近いものを持つられるのを感ずる。機器があっても、これを動かし、保守する費用のうら付けがなくては、これらの機器は飾りにすぎなくなる。私の貧乏根性は、又ぞろ手造りで何とか補おうと、時間の浪費？を私に強い始めている。幸い東大時代に科研費その他で購入出来た機器の一部を移管して頂けることとなる見通しがついたので、これが来るの間もないと思う。曲りなりにも、実験室らしい実験室が出来るのもそれ程遠くはないと思っている。

東大でもそうであったが、日本の大学における理科教育は、どうしてこうも Hard ware を強化することに無関心なのだろう。理論と実験は互にもちつもたれつで進むのが常態である。案外、今日本が諸外国から“日本たたき”に会おうとしていることの根源は、この辺りに根ざしているのかも知れない。地味な基礎的研究にはあまり投資せず、新しい技術や機械を外から導入して、生産能率をあげ、我が物顔をして、世界経済を攪乱させているように彼等は思っているのかも知れない。私達理学系の間も、心の奥底にこう言うものを持っているのかも知れない。もっと無駄が出ることを覚悟した研究投資がなされてよいのではないか、否そうあるべきだと私は思っている。

何だか、話が分ずれてしまった。東大のような老舗大学から、ここに移って感ずるのは、あまりにも、皆が、一様に同じになろうとしすぎていることである。地方の新制大学は、すべてが揃っていることは必要でなく、各学科、各分野が夫々特徴を持つことが大切である。東大は東大でよい

所が沢山あるし、そこの卒業生も立派である。しかしそれだけで世の中が成立つものではない。千葉大学はこゝらしい特徴を持つようにせねばならない。

では、どのような点に特徴を持たせるように努

力すべきなのだろうか。思慮の浅い私は、地味な根本的な問題に疑問を投げかけて、試行錯誤をくり返す泥臭さに魅力を感じるが、こゝの定年までに、5年しかない私に何ができるかと不安にもかかれている。officeから見える夕陽が美しい。